

## 明星大学出版部の学生支援報告

名 取 淳\*

### はじめに

この小論では、株式会社明星大学出版部(以下「本出版部」)が2017年から2018年にかけての学生支援活動を報告する。その活動は、主に明星教育の根幹である体験教育に係わるものである。なぜ、出版会社である本出版部が学生の体験教育に係わることとなったのかは、それぞれの活動の動機によるのであるが、基本的考えは以下のとおりである。

本出版部の目的は、その定款の第2条により、以下の通りとされている。

1. 雑誌、書籍、教科書の出版及販売
2. 教育及学術に関する研究会、講演会、懇談会等の開催及後援
3. 上記に附帯する一切の業務

定款上は、学生支援の目的の3の「上記に附帯する一切の業務」である。その本質は、大学出版部と言うものが大学の教育研究活動の一部であるということである。また、外山滋比古の言う「編集者の仕事は、すぐれた筆者をさがし、望ましい読者をさがし、両者を橋渡しすることにある」ように、ある活動とある活動の仲介をするのが編集に係わる者の任務であるからである。<sup>1</sup>これに従い本出版部の主となる業務である書籍の出版及販売の他に、学生の教育活動の支援を行ってきた。それは、「明星大学におけるキャリア教育の教育目標」<sup>2</sup>の一助となるため、以下のことを行っている。

1. 学生による書籍の表紙およびカバーのデザイン
2. 書籍印刷現場の見学および学部を越えた交流活動
3. 奨学金への寄付活動
4. 大学祭への協賛
5. 経済学部とのコラボレーション

以上について、具体的にその支援活動を報告する。

### 1. 書籍の表紙およびカバーのデザインについて

初めに、デザイン学部デザイン学科(以下「デザイン学部」)の学生による書籍の表紙やカバーのデザインについて報告する。この活動は、学生にとっては本出版部の書籍のカバーや表紙のデザインを作成することで、学生が実務体験をすることができ、その制作物が公に露出しポートフォリオとして残っていくことができる。一方で、本出版部の書籍のカバーは、地味なカバーで、市販の際にアピール力が不足するため、それを補うことを目的とした。

---

\* 株式会社明星大学出版部・事務長

### (1) 動機

学生による書籍バーデザインについては、広告制作業の友人(以下「友人」と私との会話の中から学生のデザインの発想が生まれた。

本出版部の出版物は、現在、その多くが教科書とすることを主としている。その販売先は、例えば必修の教職科目1,800部出版した場合、その中の1,200部が通信教育部、400部がブックセンター<sup>3</sup>、そして200部が一般への販売先となる。この3件の中、通信教育部は学生に指定テキストとして送るため、学科目名を記した専用カバーを巻く。その他は、販売用としてのカバーを巻いている。それは、〈画像1〉のようにシンプルなデザインで、市販用としては地味である。これについて、取締役会でアピールするカバーにならないかと意見があった。そのことを2017年の6月下旬に、友人にウェブサイトの開発の際に、話題にした。友人とは、私が明星大学の地域交流センターに私が所属していた際に、学生の活躍による地域活性の活動を行っていた。そのことを振り返り学生にカバー作成を依頼したらよいのではないかとの話になったのである。それは、デザイン学部に相談をしようとなった。

### (2) 経過

書籍の表紙・カバーのデザインは、10月から11月にかけての間に、学生5名により、9件の作品が提出された。

まずは、7月中旬に、デザイン学部長に相談をした。これについて、学部学科で相談をするとの回答を受けて、7月下旬よりデザイン担当の教員との打ち合わせを始めた。2017年は新規書籍を2件予定していたため、その2件のデザインをお願いすることとなった。実際に学生への説明等に動き始めたのは、これらの書籍の初校ゲラが出てからとなった。10月中旬より学生への説明会を開始した。説明会にはデザイン学部の教員2名と名取が行った。時間帯は昼休みや6時限目とした。学生は5名の参加があり、著者へのヒヤリング等を行った。学生たちは約2週間で作品を提出した。5名の中の4名が二つの課題に挑戦した。作品9件は、デザイン学部のこの担当教員の意見および著者の希望を聴いて社長が決定した。

### (3) 作品

9件の提出作品から2件が採用され、実際に書籍として世に出した。

作品の中の1件は〈画像2〉のとおりである。この書籍は11月下旬に校了として、印刷製本に入り、12月中旬に発行された。学生は、この画像の表1および表4を作成した。また、表2には、作者である学生の



画像 1



画像 2

氏名および所属等を記した。学生は、自分のポートフォリオに、この作品名を載せることができる。なお、扱った科目は、「道徳科」および「物理学実験」であった。学生たちは、後者は具体的なイメージを作ることができたが、前者はそのイメージを作ることが難しかったが、それぞれに意味づけをしての作品を作り出している。

#### (4) 問題点と今後

この活動は募集から採用までの期間が短く、指導教員の負担が大きかった。

この活動への参加者が5名と少なかった。多いとその対応が大変であるが、10人近くの参加者が欲しい。また、作品の作成期間が2週間ほどと短い。問題はこのことも含めて、デザイン学部の担当教員に負担をかけていることが考えられる。このためには、この活動を定例化して、年度ごとの日程を整備していくことが必要である。

なお、2018年度もこの活動が進められている。期間は相変わらずタイトであり、更に依頼書籍件数が3件の新刊となった。参加学生は、7名と前年度より増えたが、作成期間は前年度と同様であり、3作品に挑戦するという事は、学生には負担となるだろう。

## 2. 印刷現場見学について

この印刷現場の見学は、人文学部日本文化学科(以下「人文学部」)およびデザイン学部の2学部の学生および教員が合同で印刷会社を訪問し、印刷製本がされる過程を学び、現場の印刷製本を担当する方々との交流をした。

### (1) 動機

この見学は、人文学部の教員からの要望が動機となった。

2018年の7月上旬に書籍の編集にかかる授業を担当している人文学部の非常勤講師および専任教員が本出版部の本部を訪ねて来られた。現在担当している授業について、実際にその仕事を行っている方々やその現場を知ってもらいたいので、その支援をしてもらえないかとのことであった。残念ながら、当方は畑違いの場所から異動してきた者ゆえ、それはなかなか難しいのが現実であった。その要望の中の一つ、印刷現場を見学することに可能性があると考え、営業所社員に印刷会社への相談を依頼した。

### (2) 調整

通常の授業を行っている時期では、外部へ見学に行くことは難しいため、夏休み期間で教員および学生との日程調整を行った。

この見学の実施に当たっては、本出版部が印刷会社との仲介を行い、また、以前、教科書カバーのデザインの際に現場見学を希望していたデザイン学部を引き入れた。印刷会社は、文京区にある本出版部が印刷を委託している中小企業である。積極的な対応をいただき、学生たちがポストカードのデザインを予め提出すれば、印刷をもらえることとなった。両学部の都合を調整し、8月23日の午後に決まった。

### (3) 見学

デザイン学部より学生4名および教員2名、人文学部より学生2名および教員1名ならびに本出版部社員3名の計12名にて現場見学を行った。また、その後、情報交換会を実施した。

印刷会社の最寄りの駅である JR 大塚に14時に集合し、徒歩15分ほどで現地に到着した。挨拶も早々に現場説明が行われた。オンデマンド印刷およびオフセット印刷の違いを確認した。そして、予めポストカードデザインの提出があった2件について、オンデマンド印刷が行われた。直ぐに、自分たちのデザインが作品となることでオンデマンド印刷を理解した。次に、オフセット印刷のための原板作成から印刷までの流れを見た。その時の様子が〈画像3〉の通りである。この間で質問は教員側に多くあった。なお、今回の見学は印刷会社の方々の無料奉仕に基づき、こちら側からは気持ちのお土産程度であった。

見学は2時間半ほど行われ、会社を後にした。そして、次に情報交換会をおこなった。本出版部社員および印刷会社社員の馴染みである池袋の居酒屋を会場とした。構成員は、学生5名、教員3名、印刷製本担当者2名および出版社職員3名の計12人にて行った。昼間と異なり、二十歳を過ぎた学生たちはアルコールの助けもあり、活発に現場の方々および教員と情報交換を行った。なお、この経費には本出版部より若干の資金援助を行った。



画像 3

### (4) 問題点と今後

現場見学には、その現場に対する準備が必要だが、それが欠けていたようである。現場に行くには、予備知識を持ち、更に質問事項を携えていかねばならない。今回、学生たちがどれだけの

予備知識を持つために予習をしてきたのであろうか。学生たちの質問がそれほどなかったのは、準備不足であったからではないかと考える。この見学のためには、予めオリエンテーションを開くことを考えねばならない。

なお、今回は落伍者が生じた。まずは、学生が1名、見学中に体調不良となった。この原因は知らぬところであるが、体調が不十分な状態で学外に出ることは他者に負担をもたらすため、このことは当たり前であるが、周知したいところである。また、この印刷されたものが、どのように製本されていくのか、その見学も準備できればと考える。

このような機会は、印刷物に興味ある多くの学生に与えるためには、今後も、この活動を続けなければならない。そのためには、授業の一環として、学外活動の時間を授業時間に含めることにより、学生の意欲を高めることが必要と考える。

現場は「自分で実感すること」<sup>4</sup>。現場は「新たな発見がある」<sup>5</sup>。「現場にとって有益であること」<sup>6</sup>が必要である。見学者はお客さんにならず、学生であるからこそ自由に提案を述べるくらいの気持ちで、準備をしたうえで現場体験をしたい。<sup>7</sup>

### 3. その他の活動について

#### (1) 経済学部への職業奉仕

昨年、東京日野ロータリークラブ(以下「クラブ」)にて、明星大学の学生への職業奉仕を行うことを定め、今年よりその活動が始まった。

当方が現在、明星大学の職員の業務として当クラブに所属している。このクラブには職業奉仕というものが、その一つとして、学生へ職業奉仕をすることとなり、当方が経済学部の授業支援を提案した。この職業奉仕委員会の委員長と経済学部のキャリア担当教員(以下「担当教員」)および学事務室の課長が話し合い、担当教員の科目である「ワークショップ」の支援をすることとなった。これは、学生たちが企業より課題を受け、その企業を訪問し、ヒヤリング等を行い、学生間で問題解決案を作成するものである。従って、当クラブの会員の一人の会社とその対象となった。クラブ会員は、その成果発表(12月6日)に参加し、学生たちと意見交換を行う予定である。このことを機会に、この授業関係者だけでなく、本学の教職員が日野市を中心に活躍しているロータリアンとの情報共有ができることを望む。

#### (2) 大学祭への協賛金支援と問題指摘

この支援は、体験を考えた支援ではない。毎年、協賛金を出している金銭的支援である。それは、大学祭のガイドブック(以下「ガイドブック」)の中に協賛企業が記され、また学内の通路に社名の記した「提灯」および「幟」等を出すものである。例年、この資金提供だけであるが、今年度は問題があり、現在、社会人としての指導を行うことを考えている。

問題発生に対して、外部の企業であれば、学生指導をする必要のないことであるが、大学職員として最低限の学生への支援をした。まずは、協賛金の依頼通知が中央大学郵便協受付で送付されてきた。これについて、わずかな郵便料金であろうが郵便局より近い企業に直接持ってきて依頼するように伝える。次に、ガイドブックの協賛企業一覧の中に本出版部名が抜け落ちていたため、詫言状、今後の対策を指示し、その際に他のトラブルも起きないように一言加える。それでも、トラブルは続く。大学祭の初日、本出版部「幟」が出ていない。なぜ、ミスが発生に対して、念のための確認をして、ミスを生まないようにできなかったのか。危機管理に対する我々の教育不足である。大学の構成員が皆で、学生の行動への支援をして行くことを望む。



### (3) 奨学金への寄付金

本出版部は大学に対して寄付金を例年、260万円行っている。この援助は体験型の支援デアはないが、今後、何か、体験を通じた奨学金支援ができないかを検討して行きたい。

本出版部はそれほどの利益を得ていないが、赤字の年でも大学の奨学金資金への寄付を行っている。わずかな金額ではあるが、経済的支援を必要とする学生への支援を引き続き行っていきたい。また、この経済的支援を必要とする学生への在り方が、この奨学金の他にないかどうかを検討せねばならない。出版社という特徴を活かした方法として、書籍の無料配布や大学院生の修士や博士論文の書籍化などが考えられる。更に、体験型支援として、奨学生に対してインターンシップのような方法ができないか、検討をしたい。これらについて、会社の経営に影響ない程度に実行を始めたい。また、できるだけ多くの学生に支援の手が広げられるように、利益を高めていくことが肝要である。

### おわりに

本出版部は、今後も、学生の体験学習への支援を続けていく。

「教育とは知識の活用法を体得させることなのです。これを体得させるのは本当に難しいことです」とホワイトヘッドは言っている。<sup>8</sup>その方法が明星大学においては、その一つとして体験教育である。その体験教育を核として教育研究活動を行っているのが、明星教育センターである。その主な活動内容は、以下の3つからなる。<sup>9</sup>

- (1) 明星教育に関することの広報活動
- (2) 明星教育に則った教育活動の検討
- (3) 初年次教育科目「自立と体験1」やキャリア教育等の検討

本出版部は、この目的の一部に対応して活動を行っている。(1)については、教育研究の成果を出版物という形で世に出し広報している。また、一般には売れる可能性の低い『自立と体験1』の広告を新聞に出して、明星教育の広報をしている。(2)および(3)については、その教育活動の検討のために、拙著のような報告を行っている。

出版会社の商業活動以外の活動の中核は、編集である。この編集について松岡正剛が述べている。「編集の一番大事なことは、さまざまな事実や事態や現象を別々にほ放っておかないで、それらの『あいだ』にひそむ関係を発見することである。」<sup>10</sup>その「あいだ」として、例えば、落合一泰が述べているように、アカデミズムとプラグマティズムを連携させる<sup>11</sup>ことができないであろうか。それは、一部署ができることなく、個々の部局の構成員が認識していかなければならぬことである。その支援を出版やその他の形で継続的に支援をすることが本出版部の仕事でもある。

以上

### 注

- 1 外山滋比古『新エディターシップ』2009年5月、みすず書房、p.26。
- 2 明星大学明星教育センター（編）『自立と体験1(2018年度版)』2018年3月、明星大学出版部、p.4。
- 3 ブックセンターとは、明星大学内で書籍および文房具等を販売している店舗で、紀伊國屋書店が運営している。
- 4 関満博『現場主義の知的生産方法』2001年6月、筑摩書房、P.11。
- 5 関、前掲書、p.12。
- 6 関、前掲書、p.24。

- 7 関、前掲書、p.25。お客にならない。「必ず提案してこい」。
- 8 Alfred North Whitehead 『教育の目的』190年5月、松籟社、p.6。
- 9 明星大学公式ウェブサイトの「明星教育センター」の「主な活動内容」による。
- 10 松岡正剛 『知の編集術』2000年1月、講談社、p.46。
- 11 落合一泰 『「大学教育の質的転換」時代におけるわが国高等教育の変化と連続』、「明星大学明星教育センター研究紀要第6号」2016年4月、p.104。